

7) VT法／ベルボ・トナル法 (by言語学者 グベリナ)

1954-55年

【ポイント】

- ・体を動かしながら発音指導＝

⇒

- ・ (Verbo-tonal System) に基づく

1

8) SAPL (サプル), Self Access Pair Learning (byファerguson)

1970年代

【ポイント】

- ・ の影響
- ・ ⇒
- ・ イントネーション重視
- ・ バロック音楽を使用



5

9) コミュニカティブ・アプローチ／CA／CLT

1970年代

【ポイント】

- ・ を目的としたクラス活動
- ・ の考えから発展した教授法
- ・ 新しいシラバス を採用

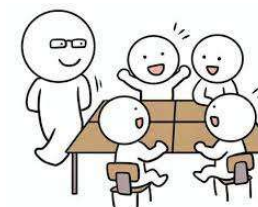


8

8

<クラス活動>

- ・ を使った活動
- ・
- ・
- ・ ディスカッション
- ・ ディベート
- ・
- ・



9

9

<クラス活動>

インフォメーション・ギャップ（情報の差）を使った活動

⇒

～流れ～ ※時間制限を設ける

ペアになり、お互い質問し合う

⇒得た情報を書く

⇒発表



10

10

<クラス活動>

ロールプレイ：

()

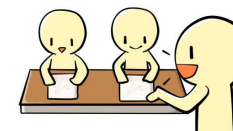
～流れ～

ペアになり、それぞれロールカードを読む

⇒話すことを考える

⇒時間制限を設けて練習

⇒発表



12

12

<クラス活動>

インタビュー・タスク：

～流れ～ ※時間制限を設ける

クラスメートに話しかけてお互い質問し合う

⇒得た情報を書く

⇒発表



13

13

<クラス活動>

● ディスカッション：あるテーマにつき、

教師は

● ディベート：あるテーマにつき、

を決め、

制限時間の中で

15

15

<クラス活動>

- : 実際に社会で起きている問題につき、話し合う
-
- **PBL** (Project-based Learning) :
 - ・
 - ・ 目的は、活動を通して、

16

16

<プロジェクト学習の進め方>

- ・ テーマの設定は学生自身が行うことが多い
 - ・
- 徳島大学の例)「留学生のための生活ハンドブック」を作成

2025/1/4

17

17

9) コミュニカティブ・アプローチ/CA/CLT

実際のコミュニケーションに含まれる3つの要素
(クラス活動に必要)

- ①
- ② : 何をどう言うか自由を選べる
⇒ 自分で言うことを考える活動にする
- ③ : 相手の反応を見て理解しているか**確認**したり、
自分の反応を変化させる

19

19

Principles of communicative methodology KEITH MORROW

コミュニケーションの指導原則 (byモロウ)

1 I Know what you are doing/teaching and why

クラス活動では「**今、何をしているのか**」を知っていなければならない

2 The whole is more than the sum of its parts

言語の部分だけではなく**全体**に目を向けなければならない

20

20

3 The processes are as important as the forms

伝達過程は言語形式と同様に重要である

4 To learn it, do it 言語を学ぶには経験が大切である

5 Mistakes are not always mistakes

学習者の「誤用」は必ずしも「誤り」ではない

21

21

コミュニケーション・コンピテンス (by ハイムズ)

⇒文法規則などの知識を
(コミュニケーション能力)



は、下記4つの能力を総合したものが
コミュニケーション・コンピテンスだとした

①

②

③

④

23

23

コミュニケーション・コンピテンス by カナルとスウェイン

① **文法能力**: を作る能力

② **談話能力**: 会話を進める能力

③ **社会言語能力**: 使える能力

④ **ストラテジー能力**: コミュニケーションが滞ったとき、
会話を円滑に進めるための能力

(など)

24

24

9) コミュニカティブ・アプローチ/CA/CLT

従来のシラバス

: 文法項目や文型で構成

新しい2つのシラバス

(シラバス)

(シラバス)

25

25

概念シラバス(ノーションナルシラバス)

⇒ 学習項目が、**概念**で構成されている

項目：

例)「頻度」⇒いつも・よく・時々・たまに・一度も～ない

26

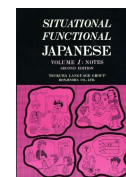
26

機能シラバス(ファンクショナルシラバス)

⇒ 学習項目が で構成されている

項目：

例:「禁止」⇒～ないでください、～てはいけません など



27

27

9) コミュニカティブ・アプローチ/CA/CLT

【背景】 第二次大戦後、ヨーロッパは多様な民族が共存
⇒ 外国語能力を向上させるために、



by 欧州評議会の一員、言語学者 **ウィルキンズ**

・ 機能主義言語学者 **ハリデー**「言語機能理論」

⇒

・ 社会言語学者 **ハイムズ**「

28

28

	オーディオリンガル・メソッド	コミュニカティブ・アプローチ
目的		
シラバス		
練習方法		
長所		
短所		

29

29

10) タスク中心の教授法 1990年代 by マイケル・ロング

指導のポイント: まず、
それから、

タスク:

目標:

長所: 他の学生との

例) 会話力の向上を目的とするクラス
タスク「レストランの場面を見て、会話をする」



33

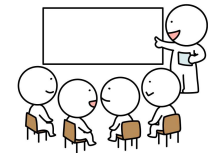
33

10) タスク中心の教授法 (TBLT) 1990年代 マイケル・ロング

コミュニケーション活動・意味重視

&

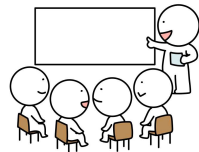
必要に応じて、学生の注意を言語形式に向けさせる指導法



36

36

言語形式重視の指導法



コミュニケーション活動・意味重視の指導法



37

37

11) 内容重視の教授法 / CBI, Content-based Instruction

1980年代 (アメリカで始まった)

- ・ある教科、トピックについて語学の教師が教える
- ・教科、トピックは、学生のニーズに合わせる
- ・ディスカッションやディベートなどを行う

38

38

内容重視の教授法に関連した教育プログラム

ESP、JSP

- ・
- ・

ESP, English for Special Purpose⇒

EGP, English for General Purpose ⇒ 一般的な目的のための英語

JSP ⇒

JGP ⇒ 一般的な目的のための日本語

39

39

1 2) CLIL (クリル), 内容言語統合型学習

Content and Language Integrated Learning

1990年代

- ・ 教科の内容を目標言語を通して学び、
- ・ ヨーロッパで始まり、現在もヨーロッパを中心に採用されている

41

41

1 2) CLIL (クリル), 内容言語統合型学習

Content and Language Integrated Learning

「4つのC」を組み合わせた授業

- ① 教科の (Content)
- ② (Communication)
- ③ (Cognition)
- ④ (Community or Culture)

42

42

1 2) CLIL (クリル), 内容言語統合型学習

Content and Language Integrated Learning

授業の流れ

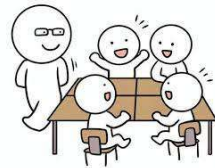
- ① をテーマとした記事、ビデオを使用 ()
- ② ペアやグループで話す ()
- ③ 発表・ディスカッション ()

43

43

13) 「協働学習 / ピア・ラーニング (Peer Learning)」

- ・一人での学習では得られなかった知識が身に付く
- ・コミュニケーション能力が向上



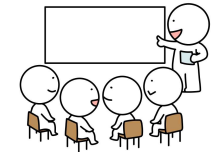
44

44

<学習観の変化>

従来:

の学習



近年:

の学習

(教師は

の役割)



45

45

14) ナチュラル・アプローチ

(by教師 テレル・言語学者クラッシェン)

1980年代

【ポイント】

幼児の母語習得
の研究から

- ・ 言語を 目標とした
- ・ 聴解優先
- ・ 学習者が自発的に発話するまで、発話を強制しない

に基づいて開発

46

46

14) ナチュラル・アプローチ

クラッシェンのモニターモデル

(第二言語習得に関する5つの仮説)

- | | |
|---|----|
| ① | 仮説 |
| ② | 仮説 |
| ③ | 仮説 |
| ④ | 仮説 |
| ⑤ | 仮説 |

47

47

クラッシュェンのモニターモデル (第二言語習得に関する5つの仮説)

① 習得－学習仮説

クラッシュェンは

「習得」⇒

「学習」⇒

※

48

48

クラッシュェンのモニターモデル (第二言語習得に関する5つの仮説)

② 自然(習得)順序仮説

・

・ その自然な順序は、

ロジャー・ブラウンの研究

⇒ 子供は類似した順序で第一言語(母語)を習得する

(英語 現在進行形-ing ⇒ 複数形-s ⇒ 動詞の過去形…)

50

50

クラッシュェンのモニターモデル (第二言語習得に関する5つの仮説)

② 自然(習得)順序仮説

<注意!>

クラッシュェンは、自然な順序の通りに教室で教えるべきだとは言っていない

52

52

クラッシュェンのモニターモデル (第二言語習得に関する5つの仮説)

③ モニター仮説

⇒ モニターが働きすぎると、スムーズな会話ができなくなる
(だから、「学習」は重要ではない)

53

53

クラッシュェンのモニターモデル(第二言語習得に関する5つの仮説)

④インプット仮説

第二言語は



=学習者の

ことで自然に習得できる



54

54

クラッシュェンのモニターモデル(第二言語習得に関する5つの仮説)

⑤情意フィルター仮説

が言語習得に影響する

情意フィルターが…高い＝

低い＝

インプット



情意
フィル
ター



習得



56

56